

書評

畠恵里子 著

『王朝継子物語と力——落窪物語からの視座——』

本宮洋幸

すべては、ここから始まっている。

いたうもの思ひ知りたるさまにて、おほがたの心ざまさとくて、琴（琴の琴）なども習はず人あらばいとよくしつべけれど、たれかは教へん。母君の、六

つ七つばかりにておはしけるに、習はしおい給ひけるままに、箏の琴をよにをかしく弾き給ひければ、向かひ腹の三郎君、十ばかりなるに、琴心に入れたりとて、「これに習はせ」と北の方のたまへば、時々教ふ。

つくづくといとまのあるまことに、もの縫ふことを習ひければ、いとをかしげにひねり縫ひ給ひければ、

（巻第一・四頁）

性を自発的に受け継ぐ継子として『落窪物語』の女君を焦点化し、「もう一つの継子物語のかたち」を打ち出すことにある。その際に肝となるのが、女君の縫製能力にあらわれた、『落窪物語』の独自な「力」の在りようである。

このような観点を支える論拠が、先に引用した本文にある。「さとし」と表現された女君の資質は、本来ならば『うつほ物語』のような、琴の琴を弾く才能を發揮しうるものとして語られている。だがそれを許されぬ環境にある女君が始めたのが、「もの縫ふこと」であった。

第一部「継子の「力」」における「第一章 聖性「さとし」」をはらむ王朝物語の子どもたち」は、ここに述べた、女君のもつ「さとし」という資質と、類まれな縫製能力を連結させるべく冒頭に据えられた章と言える。王朝物語の「さとし」の用例を検討した氏は、この語を「物語世界を牽引することとなる主人公格に相当する成加護を受身的に得る継子物語の型に対して、古代の巫者本書の目論見は、「住吉物語」に代表される、靈的な

人前の人間が、生來有している比類なき靈的質質の輝き」、あるいは超人的な成長の可能性の内包を示すキー・ワードと位置づける（本書四八頁）。落窓の女君にもそうした靈力に匹敵する「力」があるとしたうえで強調されるのは、その「力」が縫製行為へとスライドされ發現していること、そしてそれが誰に「習はせ」られたとも、「教へ」られたとも書かれていないことである。そこにあるのはあくまで能動的に「習ふ」女君の姿であり、「習はせ」る主体が「語られていない」、その意味に徹底的にこだわり抜くのが本書である。

このことが本書にとつて重要な位置を占めるのは、他の章においても繰り返し述べられていくことからもうかがえる。続く「第二章 落窓の女君の縫製行為」ではまず、従来言わてきた女君の織女性から、道頼との逢瀬に七夕伝説の刻印があることを見出す。さらに、女君の縫製行為の根底に、古代における女性の神聖な行為であつた「神衣調製」があり、巫者に匹敵する「力」が女君に宿つてゐることを論じる。

この第二章で述べられた「力」を前提として、「第三章 繙子による家の獲得」「第四章 縫いこめられた「力」」は、物語の展開をつぶさに辿つていく構成をとる。ここでは、女君の縫製行為が道頼による救出後もある存在が社会的に成功をおさめた初例でもあるという

お続くことが問題視され、その「力」が登場人物の人生、ひいては物語世界を大きく揺るがすものであること、そしてそれが継子物語における「通過儀礼」として不可欠な、女君の社会的尊嚴を取り戻していく過程に深く関与していることが論じられる。とりわけ強調されるのは、一針一針「縫いこめる」ことで衣に宿る聖なる「力」が、他の継子物語における靈験にも匹敵するものである点である。そして縫製行為が女君の主体的な意思によつていることが、ここでも重ねて確認されている。

第一部を締める「第五章 加護に匹敵する継子の「力」——貴種流離譚から『落窓物語』へ——」では、これまでの論旨をすべて引き受けながら、本書の目論見であつた、「もう一つの継子物語のかたち」としての『落窓物語』の定位が試みられている。その大枠にあるのが、継子物語を貴種流離譚の変形と捉える観点である。加護に守られる継子、という型ではない、継子自身の手で未来を切り拓く「力」をもつた落窓の女君の特性は、親にあたる存在に疎まれ、流浪する古代の貴種像、とりわけ倭建命と奈具社の天女のイメージを受け継いでいるのではないか、そして、貴種が本来もつていた死のイメージさえも払拭する女君の物語は、こうした系譜にある存在が社会的に成功をおさめた初例でもあるという

のが、氏の到達点である。

以上、この第一部は本書の柱とも言える位置を占めている。女君の縫製能力に秘められた古代性を深く掘り起した点、そのために目配りの利いたアプローチが行われている点、そして継子物語としてみたときの『落窓物語』の独自性が浮かび上がってきた点、特筆すべきものであった。

こうした本書の要点を押さえたうえで、私に思うところを二点述べる。

第一に、女君の縫製能力をどこまで超現実的なものとして捉えるか、という点である。女君の生み出した衣が物語展開を大きく動かすほどの代物であることはよくわかる。ただし、本書のきっかけが、女君に縫製行為を「習はせ」た主体が「語られていない」ことの意味にこだわることであったように、その〈力〉が靈力としては「語られていない」こともまた重い。氏の考察を踏まえるならば、『落窓物語』は、女君の〈力〉が古代の巫者の系譜にあることを想起させながらも、現実性を崩さないバランスを保つた世界観をもつてゐると言える。

したがって、第四章の『落窓の女君が手がけた衣装は、周囲からの注視や賛美を受けるだけではなく、他者の人生へ影響を及ぼすはたらきを持つ。衣装に縫い込め

られているその〈力〉は、高度の技量という言葉で説明することができる性質のものではなく、通常の人間の能⼒をはるかに超える。ゆえに、聖なる性質を持つといふるのである」（八八頁）といった、本書で繰り返される論法に接すると、疑問を感じざるを得なくなる。女君の縫製能力が「他者の人生へ影響を及ぼすはたらきを持つ」ことが、なぜ「通常の人間の能⼒をはるかに超える」「聖なる性質を持つ」ことの証明になるのか、と。

〈力〉については、序論において「あるものに、あるものからはたらきかけ、^{プラス}正ないしは負に作用するものの、「物語世界を揺さぶり、左右する、常人の能⼒を超えた靈的なはたらきがみとめられる」（二〇頁）と定義されているのであるが、女君の縫製能力が物語展開の要となつていていることと、聖なる〈力〉の存在を本当に直結させていいのだろうか。そもそも、この〈力〉の定義に問題はないのであろうか。女君の〈力〉に巫者性を看取しようとするはじめの切り口の鋭さとは別に、章が進むほどに証明不可能なことが繰り返されているような感覚に襲われた。物語では、それがあくまで現実のレベルのものとされ、靈力としては「語られていない」からである。

第二に、貴種流離譚を源とした、一二の継子物語の系

統を文学史に位置づけようとする点について。一つは、靈験色の強い受身的な継子物語の型。もう一つは、自發的な継子の〈力〉が發揮される継子物語の型である。だが、「落窪物語」が「住吉物語」のパロディ（吉海直人「住吉物語」の乳母達）（平安朝の乳母達——『源氏物語』への階梯——）世界思想社、平成七年所収）とも言われるよう、この物語は、一つめの靈験色の強い継子物語の型をもととして、次なる変換を遂げていると考えるべきではないだろうか。さらには、氏が「さとし」との関連の中で、靈力を秘めた「うつほ物語」における琴の力を置き換えたものとして「落窪物語」の女君の縫製能力を捉えた点も加味すると、興味深い。それは、道賴の権力を描く一方で、女性の力を重視する「落窪物語」は、まさに巫者としての女性を描いた、「うつほ物語」の終焉を継承・変換したものとして読みたくなるからである。琴の琴を弾ける資質を縫製能力にスライドさせる「落窪物語」の冒頭は、そうした継子物語としての枠組みにとらわれないこの物語の位置を物語つくるかのようである。先に、本書によつて「継子物語としてみたときの『落窪物語』の独自性が浮かび上がってきた」と述べたのは、このような意味を含んでいる。

こうしてみると、「落窪物語」は、靈験色の強い継子

物語の型だけでなく、「うつほ物語」をも利用して女君の縫製能力を導き、パロディとしているように思われる。「結論——今後の展望——」を先取りすると、そこでは、他者によつて救済される継子という固定観念を払底することが提案されている。そのことが「『落窪物語』論にとどまらず、継子物語のかたちのさらなる解明のこころみへ繋がつてゆくはずである」（二二三三頁）、と続くとき、やはりそこに「継子物語」の枠組みへの拘泥を感じる。本書は、この展望に表れているように、継子物語の範疇を拡げていく試みである（あとに示されている三種類の分類方法にもそれがよく表れている）。だが、むしろ継子物語の枠組から意図して離れてゆく運動が「落窪物語」そのものにあり、さらに第Ⅲ部で論じられる「源氏物語」の世界へと繋がっていく、という物語史のあり方を考える方が、私にはしつくりくるのである。

「落窪物語」が継子物語ではない、と言うのではなく、始発の基盤としてその枠組みを用いつつも、同時に古代の貴種像や「うつほ物語」といった他の要素を広く受け入れて規定の枠を脱していき、それを稀有な構成力でまとめ上げたのが「落窪物語」なのではなかろうか。第一点の現実性の問題と関連させれば、氏が女君の〈力〉を強調すればするほどに、もともとの靈験色の強い型を下

敷きとしながらも、それを明確には示さないのが『落窪物語』の個性であることが裏づけられてくるのである。

この第I部の末である第五章において、『落窪物語』の女君の〈力〉の在りようになぞらえられる人物として、『源氏物語』の紫の上が挙げられている。これは第III部への予告とも言えるものであり、内容的にも第I部と第III部は一つの流れをもつて書かれていると思しいので、第II部よりも先に第III部に目を向けておきたい。

第III部「『落窪物語』から『源氏物語』へ」は全三章、「源氏物語」における継母——継子（乃至はそれに準ずる）関係に注目し、それぞれ紫の上、明石の姫君、末摘花を中心論じられている。「第九章 継子物語と紫の上——落窪の女君との重層性——」では、継子虐めを直接受けることは回避されたものの、継子物語を下敷きとした紫の上の生を取り上げる。自らの〈力〉によって社会的な地位をつかむ紫の上の物語に、靈験的な力が潜在的に示されていることから、一方では第I部でみた落窪の女君との重なりを指摘し、また同時に『住吉物語』の姫君の影響をも想定する。

「第一〇章 明石の姫君と変奏された継子物語」は、理想の継母の創造とされる紫の上と、継子に当たる明石の姫君の関係に、継子物語の変奏をみる。「磨く」とい

う語で飾り立てられた明石の姫君が、自らの出自により生じる劣等意識と向き合ったとき、煩悶を抱える継子の姿が重なってくる。さらに、継子物語における重要要素である「通過儀礼」としての成女式の観点から、やがて明石の姫君が明石一族に統合されていくとする。

そして最後の「第一章 「蓬生」卷の末摘花と『落窪物語』——「わがむすめどもの使ひ人」考——」では、末摘花と「叔母」である大式の北の方との関係に、継子物語の系譜をみる立場から、『落窪物語』との重なりと離れを測定する。その際には、『落窪物語』において継母が女君について言った「よきあこたちの使ひ人」と、大式の北の方の末摘花を指す言葉、「わがむすめどもの使ひ人」とを関連づける手続きが注目される。そして、仮になぞらえられる光源氏と、肉親である父・故常陸の宮の靈に守られる末摘花の姿は、継子的であるとともに、靈験が無化されている『落窪物語』からは踏み出している、とする。

こうした『落窪物語』と『源氏物語』をはじめとした他作品との関係性を探る姿勢は、氏が近年意識的に取り組んでいるものであり、『落窪物語』の研究を開こうとする意欲を感じさせるものである。ただし、第III部の各論を辿るほどに、『源氏物語』において継子物語が取

り込まれた際には、その他の要素も複数同時に取り込まれ、相当の交換がなされていることを確認することもとなつた。それもまた本書の成果と言えようが、やはり第一部に関して述べたと同様に、「継子物語」という枠組みで終わりまで括ろうとするアプローチ方法が、かえつて氏の着地点を窮屈にしているように感じられた。

また、第一部では各論が緊密に連携していたのに対しして、第三部はそれぞれの連絡がみられない点、大きく異なつていて、とりわけ第一〇章は、斬新な切り口をもつて明石の姫君の心のひだを捉えようとする論考であり、その継母にあたる紫の上を取り上げた第九章との関連性について、言及がほしいところであった。同じく継子像を負いながらも、社会的な榮華を手にした紫の上にはつきりと影が差す「若菜・上」卷において、明石の姫君が自らの出生を知る契機が描かれ、姫君に対する紫の上の慈悲の人生までもが反照される意味は軽くないと思われるからである。

それでは翻つて、本書の中間にあつてやや異質な、第二部「継子の試練」に目を向ける。ここでは、非常にオーリジナリティ高い視野が示されており、本書において、いいアクセントとなつていて。

第六章と第七章は、ともに女君が籠められた北の部屋

を舞台に繰り広げられる論考であり、またその第七章と続く第八章は、この物語における性的な要素がもつ新たな意味を掘り起こす点でつながりをみせている。

「第六章 臭氣と通過儀礼」は、まず女君が住む「落窓の間」よりも、最後に籠められた「北の部屋」にこそ成女式としての試練の意味合いが色濃いことを指摘する。そして、その北の部屋に充満する「くさし」という臭氣の背後に、「^{アヴァイダンス}忌避の対象とされるべき汚穢」の示唆を読み取る。女君の試練としての「くさし」は、結婚三日目の道中に糞をつける道頼と重なり合うとも言う。

次の「第七章 通過儀礼における性的危機」でも、北の部屋の試練たる、典薬助事件が取り上げられている。そこでは、典薬助に用いられる「たはし」および類語である「姪」に着目し、典薬助を「^{マナス}負の性愛を具現する人物」として捉える。注目すべきは、典薬助に与えられる報復、そしてそれによる死を、女君の擬死の裏返しとする点である。

「第八章 蔑称という報復」においては、物語中で蔑称が用いられる、落窓の女君と面白の駒の対応関係をもとに、道頼をも含めた緊密な関連性を読み取るものである。女君にみられる多産、そして面白の駒にみられる高度な生殖能力は対をなす設定であり、さらに女君の夫で

ある道頬の生殖能力の高さを加え、面白の駒と道頬とが、女君を軸として「鏡像関係」にあると指摘する。

この第Ⅱ部はじめの第六章は、あこぎが用意した薫香のただよう落窪の間と、「くさし」とされる異臭が満ちた北の部屋との対比関係が指摘されており、『落窪物語』作者がもつ空間感覚の豊かさを想像させる好論であった。

また、面白の駒と道頬との鏡像関係を指摘した第八章から振り返ると、性的な能力という点で、前章の典薬助も視野に入つてこよう。臭氣の籠もつた北の部屋での試練と、道頬が糞をつける事件とが関連づけられていたよう、物語の構造的に、道頬が何らかのかたちで女君の試練の深層に関わっているという観点は興味深い。今後、面白の駒や典薬助が、道頬の陰画であるという見方が可能となれば、それがいかなる意図によるものかが気になるところである。

以上、本書の要点を取り上げつつ、考えるところを述べてきた。緊密な構成をもつがゆえに、『落窪物語』の論文は書くのが難しい面があるが、こうして一つの語にこだわり、その特殊性を明らかにする、さらには物語の構造を考える鍵としての意味づけを倦むことなく継続させ、という氏の真摯な研究姿勢が本書には満ちてい

る。そしてまた、文学史を書き換えるとする静かな野心にも大いに刺激されるところがあつた。結論に示された今後の展望には、世界的な継子物語への視野も示されているが、本稿に述べたように、継子物語という枠組みに留まらない方向性も同時に期待したい。

最後に、私の願望を加えて結びとする。それは、氏の継母論を読んでみたい、というものである。本書では、継子の〈力〉と試練にまつわる男たちの影に注目しつつ考察がなされてきたのだが、通過儀礼として乗り越える課題がある以上、超えるべき対象としての継母の存在は不可欠である。もちろん、継子の〈力〉を強調するため、本書では意識的に継母の影を最低限に薄めたに違いないが、氏による、新たな継母像がみてみたい。『落窪物語』研究の新たな可能性を示した本書を読んだ者としての願いである。

*

『落窪物語』の本文引用は、新日本古典文学大系一八「落窪物語 住吉物語」（藤井貞和・稻賀敬二、岩波書店、平成元年）によつた。私に改めた箇所がある。畑氏は九条家本の表記を尊重する立場から、本文を改めることはしていない。

（一〇一〇年一〇月刊、新典社、A5判、二七〇頁、
七、五〇〇円+税）

（ほんぐう・ひろゆき／北海道武藏女子短期大学）